

幼年時代の記憶と集合的記憶(1)

神谷 英二

要旨 ヴァルター・ベンヤミンは、幼年時代にこだわり、幼年時代の記憶に特別な意味を与えている。本研究は、ベンヤミンの思索を手がかりに「幼年時代の記憶は集合的記憶とどのように関わるのか」を問う。テキストとして、『ベルリン年代記』、『1900年頃のベルリンの幼年時代』、『パサージュ論』を主に扱う。本研究は、2部構成であり、本論文はその前半部をなす。まず最初に、ベンヤミンにおける子どもの特権性を明らかにする。次に、神話的世界に生きる幼年時代からの断絶について考察し、同時に、一度断絶した幼年時代を想起する技法について論ずる。さらに、幼年時代の記憶の場としてのHofの役割を明らかにする。その後、幼年時代の記憶と集合的記憶のつながりを素描し、最後に、幼年時代の記憶と集合的記憶の交差を探究する上で、『ドイツの人びと』がもつ意味を示す。

キーワード：ベンヤミン 幼年時代 記憶 集合的記憶 神話

1 はじめに

ヴァルター・ベンヤミンは、幼年時代にこだわった。

まず、自分自身の幼年時代、子ども時代への言及を膨大な原稿として残している。それらは、言うまでもなく、現在、『ベルリン年代記』、『1900年頃のベルリンの幼年時代』（以下、『ベルリンの幼年時代』と略記。）として知られている作品群である。

しかしそれにとどまらない。彼は子どもの本やおもちゃにもただならぬ関心を寄せていた。それらを収集し、多くの文章も残している。特に、絵本に関しては、当時ベルリンでも一、二

を争う収集を誇っており、ベルリンの出版社が絵本に関する執筆依頼を他の収集家にした際には大いに落胆したほどである（cf. GB II, 487）。また、彼が亡命の途上、フランス・スペイン国境近くで自死した際に携えていた鞆のなかにも、子どもの本があったと言われている（cf. 丹生谷 2002）。

さらには、1929年から32年にかけて、ベンヤミンは当時まだ若いメディアであったラジオのために、原稿を執筆し、自らマイクの前に立ち、子ども向きの講演シリーズを放送した。そこでは、いわば『子どものための文化史』として、「魔女裁判」、「ファウスト博士」、「カリオストロ」などヨーロッパの基本問題について語って

いる (GSVII, 68ff.)。

このように、ベンヤミンは自分自身の幼年時代にも子どもという存在者一般にも強くこだわり続けているのである。なぜ、ここまでベンヤミンにとって子どもは特権的なのだろうか。

『パサージュ論』を踏まえて、哲学的考察としてひとつ確かに言えることは、子どもは、進歩を信じてやまない19世紀という時代の集合的意識が見る「集団の夢」からの覚醒の契機となりうるからということである。例えば、『パサージュ論』では次のように述べられている。「幼年時代にまかされた仕事とは、新たな世界をシンボル空間のうちに組み入れることである。何しろ子どもは、大人が決してできないことをすることができる。つまり、新たなものを再認識することができるからである。」[K1a, 3]そして、この「集団の夢」からの覚醒には、幼年時代の記憶が集合的記憶と密接に結びつき、ベンヤミンの記憶論と歴史哲学にとって特別な位置を占めていることが強く関わっている。

本論文の問いは、「幼年時代の記憶は集合的記憶とどのように関わるのか」である。テキストとしては、『ベルリン年代記』、『ベルリンの幼年時代』、『パサージュ論』を主要な研究対象とする。

2 子どもの特権性

ベンヤミンにおいては、子どもは、進歩を信じてやまない19世紀という時代の集合的意識が見る「集団の夢」からの覚醒の契機となりうる特権的な存在者である。先に触れた引用をもう一度繰り返しておこう。

「幼年時代にまかされた仕事とは、新たな世界をシンボル空間のうちに組み入れることであ

る。何しろ子どもは、大人が決してできないことをすることができる。つまり、新たなものを再認識することができるからである。」[K1a, 3]

そもそも、「新たなものを再認識する」という矛盾した表現はいかなる事態を指し示すのだろうか。これは、子どもは新しく登場したものを集合的記憶のなかにあるアルカイックなシンボルとして再認識するということである。これはいわば個人を超えた集合的なデジャ・ヴュとも言える現象である。この点について、『パサージュ論』のなかでは、次のように書かれている。

「近代的な技術の世界と、神話のアルカイックな象徴の世界の間には照応関係の戯れがある、ということ否定できる者がいるとすれば、それは、考えることなくぼんやりものを見ている者ぐらいだ。技術的に新しいものは、もちろん初めはもっぱら新しいものとして現れてくる。しかし、すぐそれに引き続いてなされる子どものような想起のなかで、新しいものはその様相をたちまちにして変えてしまう。どんな幼年時代も、人類にとって何か偉大なもの、かけがえのないものを与えてくれる。どんな幼年時代も、技術的なさまざまな現象に興味を抱くなかで、あらゆる種類の発明や機械装置、つまり技術的な革新の成果に向けられた好奇心を、もろもろの古い象徴の世界と結びつけるものだ。」[N2a, 1]

そして、こうした新しい技術により生み出された物を「神話のアルカイックな象徴の世界」に結びつけるという子どもの特権的機能は、成人した者であっても幼年時代の記憶に遡ることにより果たしうるのである。

「子どもが(そして、成人した男がおぼろげな記憶のなかで)、母親の衣服のすそにしがみついていたときに顔をうずめていたその古い衣

服の襷のうちに見いだすもの——これこそが、本書が含んでいなければならないものである。」

[K2, 2] (下線は神谷による)

ここにある「母親の衣服のすそにしがみついていたときに顔をうずめていたその古い衣服の襷のうちに見いだすもの」とは幼年時代の経験そのものではない。それは記憶のなかに含まれている形象のことである。この形象について、『歴史の概念について』においては、次のように述べられている。「過ぎ去った事柄を歴史的なものとして明確に言表するとは、それを『実際にあったとおりに』認識することではなく、危機の瞬間にひらめくような想起を捉えることを言う。歴史的唯物論にとっては、危機の瞬間において歴史の主体に思いがけず立ち現れてくる、そのような過去の形象を確保することこそが重要なのだ。」(GS I, 695) すなわち、これはベンヤミンの考える歴史的唯物論における、救済 (Rettung) としての歴史認識の対象である形象のことである。(神谷 2009)

もちろん、この機能は大人ならば誰でももちうると言うのではない。『ベルリンの幼年時代』「ロッジア」の冒頭で、ベンヤミンは、「生まれたばかりの赤ん坊を目を覚まさせずそっと抱き寄せる母のように、人生は長い間、幼年時代のいまでもまだ、ほの柔らかなままの思い出を、その胸に抱いている」(GS VII, 386)と述べている。多くの人＝大衆は、目を覚まさないまま、幼年時代の記憶をただ胸に抱いたまま、いわば眠ったままにしておくのである。しかしながら、歴史の主体となりうる遊歩者には、覚醒の瞬間、「認識が可能となる今」が訪れ、「集団の夢」から目覚める。そして、目覚めとともに想起し、「母親の衣服のすそにしがみついていたときに顔をうずめていたその古い衣服の襷の

うちに」そうした形象を見出しうるというのである。

3 幼年時代との断絶

幼年時代の記憶について考察しようとするとき、まずそもそも、幼年時代とその後の生とはどのように異なるのかを研究しておく必要がある。

まず、『ベルリンの幼年時代』「2つの判じ絵」のなかの記述を見てみよう。「当時、私には、大人の世界の岸辺が、花壇の見える運河のあの対岸と同じように、——そこへは、フロイラインの手に引かれて散歩するときにも、一度も足を踏み入れたことがなかった——たくさんの年月の川によって、自分の知る年月から分け隔てられているように思っていた。」(GS VII, 401)

ここには、子どもの世界と大人の世界の完全とも言える隔絶がある。子どもは対岸にある別の時間が支配する世界に一度も足を踏み入れることはない。子どもは大人とは異なる時間・空間を生きていたのであり、それはいわば神話的世界である。すなわち、子どもは神話の国の住人なのである (多木 2003a, 36)。

それでは、なぜ、子どもは神話的世界を生きると言えるのか。この点について、詳細に考えてみよう。メニングハウスによれば、神話においては、「あらゆる事物や現象に、自然科学的な観点から見た、その本来の存在や作用を大きく超え出た意味が付与される。そこでなされるのは後から事物に生命を与えたり、魂を与えたりすることではなく、むしろ内部と外部、自己と世界、生と死といった厳然とした区分に先立った、あるいはその彼岸にある知覚空間や生活空間の構成である。」(Menninghaus 1986,

26) 大人の世界には、「内部と外部、自己と世界、生と死といった厳然とした区分」がある。それに対して、子どもの世界はこうした区分に先立った、まさに「彼岸」にある、神話の世界だということなのである。^{*1}

次に、幼年時代からの断絶の場面に視線を移そう。『ベルリンの幼年時代』のなかに「月」という断章がある。これは最終稿では、ベンヤミン自身の手でかなり修正や変更が加えられている。その最終稿では削除された部分に、幼年時代と大人との隔たりを考える際に重要な記述が含まれている。

「この覚醒は、それまでの覚醒とは異なり、夢の終着点を定めるものではなく、夢が終着点を見逃してしまったことを、そして、子どもの私が経験してきた月の支配は私のこれ以後の全生涯にわたって崩れ去ったことを、私にそっと告げ知らせていた。」(GS IV, 302)

浅井も指摘するように(浅井 1997, 669)、ここには「時間の二重化」がある。子どもは目覚めてしまう。しかし、この目覚めは、それまでとは異なり、夢は終着点が変わらず、終わることができない。もはやここにはかつての「庇護された安らかさ」(GS VII, 385)はない。そして、昼の世界で彼が成長するにしたがって、まなざしの縮尺は変化し、物は私から離れてゆき、縮んでしまう(GS VII, 430)。その縮んでいった物のなかに、終着点を見失った夢とともに内なる子どもが棲みつくのである。この内なる子どもは、『ベルリンの幼年時代』に登場するアレゴリーを用いるならば、「とんがり帽子を被った地の精」である「せむしの小人」である。そして、「母親の衣服のすそにしがみついていたときに顔をうずめていたその古い衣服の襞のうち」へと下降してゆく、大人のまなざし

のなかに、終着点を見失った夢(幼年時代の記憶)は、もはや絶たれたものとして、沈殿して存在し続けることになる。

小人は、成長したベンヤミンに対して先回りし、「私が手に入れたものすべてのうちの半分、忘却という半分」(ibid.)を取り立てる。しかし、ベンヤミンは小人の姿を見ることはなく、いつも小人がベンヤミンを見ていたというのである。まさに、終着点を見失った夢とともに内なる子どもが、大人のまなざしのなかに、沈殿して存在し続けているのである。

しかし、ベンヤミン自身がこうした幼年時代からの断絶だけでなく、幼年時代の記憶の再獲得をも経験していなければ、このように言ったところで、それはただ虚しい言説であろう。それでは、ベンヤミンはどのようにして、絶たれたものである幼年時代の記憶を再び手に入れることができたのか。それはまさに、「書き留める者の現在」(GS VI, 471)において、自分の経験の結果にもうひとつの切れ目を入れ、そこにある形象に対して、新しい、それ以前とは異なった排列(Gliederung)を認め、この『ベルリンの幼年時代』を書くという行為そのものによってなのであった。それでは、『ベルリンの幼年時代』を書くという行為そのものによって、幼年時代の記憶を探し当てる技法とはどのようなものなのか。次にこの点を考察しよう。

4 想起の技法

現在、全集第4巻にDenkbilderとしてまとめられている草稿のなかに含まれる断章「発掘と想起」(Ausgraben und Erinnern)^{*2}において、ベンヤミンは想起する者について次のように論じている。

「記憶は過去を探知するための用具ではなく、むしろ媒体である。古い都市が埋まっている大地が媒体であるように、それは体験されたものの媒体である。自分の埋められた過去に近づこうと思うものは、発掘する男のような態度をとらなければならない。特に、繰り返し同一の事実関係にたちもどることをためらってはならないし、土を振りまくように、その事実関係をまきちらし、地面を掘り返すようにその事実関係を掘り返すことをためらってはならない。なぜなら事実関係は、単なる地層にすぎず、入念な探究によってはじめて、そこから発掘の名に値するものを、取り出せるのだ。つまりそれは形象なのだが、その形象はあらゆる過去の関係から切り離され、——ちょうど収集家の陳列室に置かれた断片やトルソのように——私たちの未来の認識という醒めた部屋に貴重品として収められている。計画にしたがって発掘することも有益である。しかし暗い地面に用心深く、まさぐるようにスコップを入れることも同じように必要である。発掘物の目録だけを作成し、今日の地面に、古いものが保存されている場所を記録しない者は、最高のものを自ら逸しているのである。それゆえ真の想起は、報告的になされるのではなく、探究するものがその想起をものにした場所を正確に記述しなければならないのだ。」(GS IV, 400f.)

ベンヤミンの初期言語論以来、保持されてきた媒体としての言語という捉え方³³と同じく、ここでは記憶は媒体と考えられている。したがって、想起は、不動の過去の貯蔵所を計画的に開くという行為ではなく、何度も繰り返すべき探究なのである。こうした技法を駆使することによって、ベンヤミンは、「なにもかもがまだ意味ではなく、なにもものかの合図でしかない

子供の経験が生成する深さまで、記憶を掘り進めていった」(多木 2003a, 35) ののである。『ベルリンの幼年時代』を構成する短章も、こうした作業から取り出された形象群なのである(園田 1994, 132)。

5 幼年時代の記憶の場—Hofの特権性

『ベルリンの幼年時代』の始まりは、「ロジリア」(Loggien) である。なぜ、アドルノ稿やアドルノーレックスロート稿などとは異なり、ベンヤミン自身の編集した最終稿では、それまでの「ティーアガルテン」や「ムンメレーレン」ではなく、「ロジリア」が冒頭に置かれているのか。この意味は決して小さくはない。

ベルリンという当時のヨーロッパ有数の大都会に生まれ、育ったベンヤミンにとって、幼年時代の記憶の源泉となる場所として、Hofが特権的な位置を占めている。この特権的なHofは単に中庭だけを意味するのではなく、中庭に面したロジリアを含み、停車場(Bahnhof)をも含んでいる。「都会が打ち開かれて、子どもを立ち去らせたり、再び迎え入れたりする場所は、さまざまなHofであった。」(GS VI, 503)³⁴

ここで言うロジリアは、住居の側面から外に突き出していない屋根付きのバルコニーのことであり、中庭に開け放たれ、上階のロジリアの床が屋根代わりになった空間である。ベンヤミンの記憶にあるロジリアでは、上階を支えているのは、古代ギリシア建築風の女像柱(Karyatide)である。そこは邸宅の内部と外部の中間地帯である。ここもまた、(メニングハウスが指摘する、)ベンヤミンが越境する「敷居(Schwelle)」のひとつである(Menninghaus 1986, 34)。

「私の幼年時代の思い出を何にもまして心優しく育ててくれたのは、中庭への眺めだった。」そして、成人となったベンヤミンの「想いの空を支配している形象やアレゴリーたちも」、中庭の風のそよぎのなかに居並んでいたというのである (GS VII, 386)。

すなわち、ここから分かるように、ベンヤミンは、「ロッジアの記憶に、子供にとっては決定的であったふたつの世界の見えない境界を掘りあてていた」(多木 2003a, 34) のである。そして、「ベルリンの人々の住むという営みは、ロッジアを境界としている。ベルリン——つまりは都市神そのもの——は、ロッジアにおいて始まるのである。」(GS VII, 387f.) 幼年時代の記憶は、神話的世界についての記憶である。それゆえ、ベルリンに関する、ベンヤミンの幼年時代の記憶は、いわば都市神に捧げられた神話なのである。したがって、ロッジアはベルリンという都市神の神話が始まる場でもあることになる。

そして、「ロッジアにはこの神が、自己忘却することなく現前し続けているので、その傍らでは、一時的なものは何であれ、地歩を確保することができない。この神に庇護されていればこそ、場所と時間はそれぞれに我にかえり、また互いに帰属し合うのだ。場所と時間は、このロッジアでこの神の足許に身を横たえている。」(GS VII, 388)

「市街電車の音」や「絨毯を叩く音」など、ロッジアにはさまざまな音があった。神話的世界においてはこれらは単なる物理的な音ではなく、独自の意味をもつシンボルである。「私にはそれがまだ解読できなかった。つまり何もかもが、この中庭では、私に送られてくる合図になったのだ。」(GS VII, 386) 緑のブラインド

が巻き上げられる音、夕暮れ時に鎧戸がガタガタと巻き下ろされる音、そのなかに多くの知らせが解読されることのないまま封じ込められていたとベンヤミンは言う。子どもにとって、世界のすべては、やがては解読しなければならない「判じ絵」(Ratselbild) であったのである (cf. GS VII, 400f.)。

また、停車場 (Bahnhof) も類似の役割を強く担っている⁵⁾。そもそも『ベルリン年代記』や『ベルリンの幼年時代』には、停車場がしばしば登場する。これは、『パサージュ論』でも同様である。「私は、こういう彷徨の道すがら、それぞれの市域も都会そのものをも併せ持つ停車場にとりわけ親しんだのである。」(GS VI, 472)

そして、避暑に出かける際などに、ベンヤミンはベルリンという大都市そのものの「敷居」としての停車場、Hofとしての停車場を経験する。「停車場——発車の際、構内が開けていくその光景は、ひとつのパノラマであり、蜃気楼を浮かび上がらせる枠組みであった。線路が霧のなかで互いにひとつになっているところほど、遙かな彼方はなかった。」(GS VI, 503)

ところで、幼年時代の記憶と集合的記憶の関わりを探究する本研究にとっては、ロッジアでの時間に関する、次の記述は決して無視しえないものである。

「中庭の方に開かれている、陰の多いこの小さな空間のなかで、時間が古びていったのだ。」(GS VII, 387)⁶⁾

この「時間が古びていった」(Die Zeit veraltete) とは、いかなる意味なのか。ロッジアでは時間が古びていったからこそ、「私が自宅のロッジアで出会う午前は、すでに以前からずっと午前だったので、他のどこで出会う午

前よりも、もっと午前そのものであるように思われた。」(ibid.) もちろん、この事態は午前だけにあてはまるのではなく、その後が続く、1日の時間のすべてにあてはまるものである。そして、「私がここで午前が来るのを待つということは、決してありえなかった。つねに午前の方が、すでにそこで私を待ち受けていた。私がそこに午前をやっと見つけ出したときには、午前はずっと前からそこにいた。というよりも、いわば流行遅れになってしまっていた。」(ibid.)

ここにはアルカイックなものを見つめ、再認識するまなざしがある。そして、「過去がさし迫る、未来を覗かせる場所」という性格がロτζアにもあることが分かるのである。

こうした場所については、『ベルリンの幼年時代』の「川瀬」と題された断章のなかに、次のような重要な洞察が示されている。

「動物園のこの片隅は、来たべきものの特徴を備えていた。それは予言的な片隅であった。というのも、未来を覗かせる力をもっていると語り伝えられる植物があるが、場所にも、同様の能力をもつところが存在するからだ。大抵は見捨てられた場所であり、また、壁を背にして立つ木々が梢を伸ばしているあたりだったり、誰ひとり立ち止まることのない袋小路や前庭だったりもする。そうした場所では、本来私たちの眼前にさし迫っているものが、すべて過去のものであるかのように思われるのである。」(GS VII, 407)

「動物園のこの片隅」と同じく、ロτζアもまた大人たちにとっては、めったに使われない、見捨てられた場所であった。

ベンヤミンにとって重要なのは、過去への憧憬ではない。未来の認識の光のもとで眺めら

れた記憶こそが問題なのである(多木 2003a, 32)。そして、こういった場所では、未来が過去のなかに隠されているという認識が可能となる。そして、「未来が過去のなかに隠されている」とは、「未来への想起」とも言いうる事態である。

6 幼年時代の記憶と集合的記憶のつながり

ベンヤミンは、『パサージュ論』のなかで、集合的記憶を幼年時代と関連させて考察している。

「街路はこの遊歩者を遙か遠くに消え去った時間へと連れて行く。遊歩者にとってはどんな街路も急な下り坂なのだ。この坂は彼を下へ下へと連れて行く。母たちのところという訳でなくとも、ある過去へと連れて行く。この過去は、それが彼自身の個人的なそれでないだけに一層魅惑的なものとなりうるのだ。それにもかかわらず、この過去はつねにある幼年時代の時間のままである。それがしかしよりによって彼自身が生きた人生の幼年時代の時間であるのはどうしてであろうか。アスファルトの上を彼が歩くとその足音が驚くべき反響を引き起こす。タイルの上に降り注ぐガス灯の光は、この二重になった地面の上に、不可解な(両義的な)(zweideutig)光を投げかけるのだ。」[M1, 2](下線は神谷による)(cf. 鹿島 1996, 22f.)

私がかつて詳細に論じたように(神谷 2009)、遊歩者とは、ベンヤミンが「19世紀の首都・パリ」に見いだした、目的をもちずに街路を彷徨う人物像であり、それは「観察する人」であると同時に「陶醉する人」でもある。そして、「集団の夢」とは、進歩を信じてやまない19世紀という時代の集合的意識が見る夢であ

る。群衆は、この夢から目覚めることはないが、遊歩者には「弁証法的形象」を構成しうる商品を通路として、「認識が可能となる今」である覚醒の瞬間が到来しうる。この覚醒は、「想起のコペルニクスの転回」とも呼ばれ、「歴史的唯物論」による歴史を構成する「歴史学の新たな弁証法的方法」となる想起でもある。そして、遊歩者は「歴史の主体」になりうる存在者でもある。

すなわち、遊歩者は、「認識が可能となる今」である覚醒の瞬間に、進歩を信じてやまない19世紀という時代の集会的意識が見る「集団の夢」からひとり目覚め、過去を想起する。しかし、この過去は、彼自身の個人的な過去ではないのである。「二重になった地面」、これは、自己の幼年時代の時間と自己以外の誰かの幼年時代の時間が重なり合い融合した現象のことを指している。これこそが、ベンヤミンにおける集会的記憶の存在様式に関する表象のひとつである。

先に挙げた断章のなかの「アスファルトの上を彼が歩くとその足音が驚くべき反響を引き起こす。」という一文も重要である。この文章を解説する手がかりは、『ベルリン年代記』のなかのデジャ・ヴュについて述べた箇所にある⁹⁷。ベンヤミンによれば、デジャ・ヴュとは、「流れ去った人生の暗闇のなかで、いつのときか鳴り始めたらしい音響や叫びが咄を呼び起こし、その咄にいま私たちが驚かされる、とでもいった出来事を指しているはずなのである。」(GS VI, 518)そして、「瞬間がすでに体験されたもののように私たちの意識に入ってくるときの衝撃は、大抵、音という形態をとって私たちに打つ」とベンヤミンは指摘する。もちろん、ここでは、デジャ・ヴュをこのように解釈すること

が正しいかどうかは問題なのではない。そうではなくて、ベンヤミンが、過去の、覚醒の瞬間である現在への到来を音の比喻で語ろうとしていることに注意が払われるべきなのである。そして、ここで語られる「反響」とは、現在において、複数の主体における幼年時代の記憶の間に響き合うものである。

もちろん、この過去は同時に未来でもあるということになる。私たちが衝撃とともに出会う、「ひとつの身振りやひとつの言葉」、それらは、「未来が私たちのところに忘れていったものなのである。」(GS VI, 519)したがって、これはいわば「逆向きのデジャ・ヴュ」とも言える現象である(道籟 1997, 146)。

ベンヤミンにとって、『ベルリンの幼年時代』は、自分の幼年時代への憧憬の感情を抑制すべく、「過ぎ去ったものの偶然的、伝記的な回復不可能性ではなく、必然的、社会的な回復不可能性にまなざしを向けて」(GS VII, 385)、執筆された作品群である。そうすることで、彼は「大都市の経験が市民階級の、あるひとりの子どもの姿をとりつつ沈殿している、そのような形象を捉えようと努めた」(*ibid.*)のである。この形象こそが集会的記憶の断片なのである。

7 『ドイツの人びと』のもつ意味

幼年時代の記憶と集会的記憶の交差を探究する本研究にとって、実は『ドイツの人びと』は無視しえない作品である。この著作は、ベンヤミンがゲーテの死の年(1832年)を真ん中に置き、1783年から1883年までの百年間に書かれた27通の書簡を選び、コメントを付したアンソロジーである。その名が『ドイツの手紙』でも『ドイツの人びとの手紙』でもなく、『ドイツの

人びと』なのである。このことの意味は重い。

『ドイツの人びと』と『1900年頃のベルリンの幼年時代』は、時間的遠方としての過去の記憶を読み、見開こうとする、そのまなごしの共通性のなかで互いに対をなす関係にある。それは、他者の言葉が織りなしている過去の記憶を読む空間と、みずからの私的な過去の記憶を読む空間との対照関係である、と言える。」(浅井1997, 657)

『ドイツの人びと』の邦訳者である浅井はこのように述べる。しかしながら、これは表層的すぎる分析ではないのか。手紙を読み、コメントをするという営みを「他者の言葉が織りなしている過去の記憶を読む」行為と簡単に性格づけてしまってよいのだろうか。浅井は次のようにも述べる。

「それぞれの手紙に付けられたベンヤミンの註釈は、それぞれの〈私〉の言葉を、歴史的ないし社会的性格を担う言葉へと変貌させる。」そして、「このパースペクティブのなかで、世界の片隅に埋もれている〈私〉の言葉が、歴史という集団の記憶と出会い、そこに——(中略)——小さな木槌で新たな陰影を打ち出すのである。」(ibid.)

『ドイツの人びと』は、27通の手紙を通して、手紙の書き手ひとりひとりの言葉を手がかりに、「ドイツ市民階級の偉大な典型たる人びと」(WN10, 86)の精神の足跡を辿り、その根源を探究する試みである。この探究の途上では、〈私〉の言葉は、個別性を稀薄化させ、「典型たる人びと」が発する形象へと変貌するのである。

なるほど確かに、他者の言葉が織りなしている過去の記憶を読む空間と、自己の私的な過去の記憶を読む空間、この両者が相互に浸透し合

う場面がある。こうした場面にベンヤミンは敏感に反応する。例えば、『ドイツの人びと』のなかには次のような印象深いコメントがある。詩人アンネッテ・フォン・ドロステ＝ヒュルスホフ(Annette von Droste-Hülshoff)の22歳の折の手紙に対する註釈である。

「子どもの頃になじみ親しんでいたものが、飾りでもいい、張り出し窓でも、本でもいい、それが昔のまま変わらずにある姿に、いつか年をとってから思いがけず出会ったとき、それは私たちにぐっと近寄ってくるのだ。この手紙が語っているものは、そうした事物にほかならない。そして私たちは、忘れられてしまったもの——それは昼も夜も私たちの内部に、想起される用意を整えて潜んでいる——への憧れを、新たに感じることだろう。この憧れは、あの幼年の日々を呼び起こすものであるというよりも、幼年の日々の筈なのである。なぜなら、この憧れこそが、幼年時代を作り出すための素材にほかならなかったのだから。」(WN10, 54)

註釈の対象となっている手紙のなかには、「自分が行ったこともない土地、自分が持ってもいないもの」に憧れるという筆者の性癖が述べられ、「遠くの国々」、「話に聞いたことのある偉大な興味深い人びと」、「遠くにある芸術作品」、「すでに舞台を観た劇」、「以前に読んだことのある本」などへ憧れる気持ちが綴られており(WN10, 56f.)、この憧れを「幼年時代を作り出すための素材」として抽出してみせるのである。

本研究のこれまでの考察を踏まえて、他者の言葉が織りなしている過去の記憶を読む空間と、自己の私的な過去の記憶を読む空間、この両者が相互に浸透し合う場面に関して、さらに

分析を深めるためには、『ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて』のなかで、「経験」について問いつつ述べられている以下の洞察が思い出されるべきである。

「厳密な意味での経験が存在しているところでは、個人的な過去のある種の内容が集合的な過去の内容と記憶のなかで結合する。」(GS I, 611)

この洞察について探究することにより、幼年時代の記憶と集合的記憶のつながりをより鮮明に描きだすこと、これが本研究における次の課題である。

(以下、「幼年時代の記憶と集合的記憶(2)」に続く。)

凡例

(1) ヴァルター・ベンヤミンの著作からの引用箇所は、括弧内にGSの略号の後に、以下の全集の巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で記す形式で示す。

Walter Benjamin, *Gesammelte Schriften*, Unter Mitw. von Theodor W. Adorno hrsg. von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser, Suhrkamp, 1972-1989.

ただし、『パサージュ論』(*Das Passagen-Werk*)所収の草稿群については、整理番号により示す。

(2) ヴァルター・ベンヤミンの書簡からの引用箇所は、括弧内にGBの略号の後に、以下の書簡集の巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で記す形式で示す。

Walter Benjamin, *Gesammelte Briefe*, hrsg. von Theodor W. Adorno Archiv, Suhrkamp, 1995-2000.

(3) 新たに刊行が開始された『作品と遺稿』からの引用箇所は、括弧内にWNの略号の後に、巻数と頁数をアラビア数字で記す形式で示す。

Walter Benjamin, *Werke und Nachlaß, Kritische*

Gesamtausgabe, im Auftrag der Hamburger Stiftung zur Förderung von Wissenschaft und Kultur hrsg. von Christoph Godde und Henri Lonitz in Zusammenarbeit mit dem Walter Benjamin Archiv, Suhrkamp, 2008-.

(4) 引用に際しては既存の邦訳書を参照したが、訳文は必要に応じて神谷自身が訳し直している。

註

*1 ここでは、ベンヤミン自身が『ベルリン年代記』や『ベルリンの幼年時代』に表現されたティーアガルテンを巡る思索を「ティーアガルテン神話学」(GS VI, 470)とまで言っていることにも注意が払われるべきである。

*2 Benjamin-Archiv, Ms. 929 (cf. GSIV, 1001)

これと類似の文章が『ベルリン年代記』のなかにもある(GS VI, 486f.)。

*3 初期言語論については、私は別稿ですでに詳しく論じた(神谷 2010)。

*4 私は、ベンヤミンが幼年時代から収集していた「絵はがき」も、少年ベンヤミンにとってHofと同様の役割を果たしていたと考えている。

*5 『パサージュ論』では、停車場は、パサージュなどと並んで、「集団の夢の家」の一例として挙げられている。「集団の夢の家とは、パサージュ、冬園、パノラマ、工場、蠟人形館、カジノ、停車場などのことである。」[L1, 3]

*6 アドルノーレックスロート稿には、「このロッジアでは、時間の経過そのものが何かある古めかしさを帯びてきていた。」(GS IV, 295)という記述もある。この箇所は、最終稿では「この場所そのものが帯びるに至った古めかしさに、そうした品々はよく似合っていた」(GS VII, 387)と書き直されている。

*7 このデジャ・ヴュに関する記述は、『ベルリンの幼年時代』アドルノ稿やアドルノーレックスロート稿

では、「ある計報」のなかに含まれていたが、最終稿では削除されている。

<参考文献>

- Adorno, Theodor W. (1970): *Über Walter Benjamin*, Suhrkamp.
- Doderer, Klaus (hrsg.)(1988): *Walter Benjamin und die Kinderliteratur, Aspekte der Kinderkultur in den zwanziger Jahren mit dem Katalog der Kinderbuchsammlung*, Juventa.
- Lenke, Anja(2007): *Gedächtnisräume des Selbst: Walter Benjamins "Berliner Kindheit um neunzehnhundert"*, 2 Aufl., Königshausen & Neumann.
- Menninghaus, Winfried(1986): *Schwellenkunde, Walter Benjamins Passage des Mythos*, Suhrkamp.
- Muthesius, Marianne(1996): *Mythos Sprache Erinnerung : Untersuchungen zu Walter Benjamins "Berliner Kindheit um neunzehnhundert"*, Stroemfeld.
- Witte, Bernd(1984): Bilder der Endzeit. Zu einem authentischen Text der *Berliner Kindheit* von Walter Benjamin, *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte*, 58 (4), 570-592.
- (hrsg.)(2008): *Topographien der Erinnerung : zu Walter Benjamins Passagen*, Königshausen & Neumann.
- 浅井健二郎 (1997) : 「解説」、ヴァルター・ベンヤミン『ベンヤミン・コレクション3 記憶への旅』筑摩書房くちくま学芸文庫>
- 今村仁司 (2000) : 『ベンヤミン「歴史哲学テーゼ」精読』岩波書店<岩波現代文庫>
- 岡本和子 (2007) : 「ベンヤミンにおける子ども一言語と物」、『大東文化大学紀要・人文科学』45、大東文化大学、49-65
- 柿木伸之 (2005) : 「経験の廃墟から新たな歴史の経験へ—経験の可能性を探究するベンヤミンの思考をめぐって」、『比較思想研究』32、比較思想学会、37-48
- 鹿島茂 (1996) : 『『パサージュ論』熟読玩味』青土社
- 神谷英二 (2009) : 「遊歩者・記憶・集団の夢—ベンヤミン『パサージュ論』による記憶論構築のために—」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』17(2)、福岡県立大学人間社会学部、67-79
- (2010) : 「固有名と記憶(1)」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』18(2)、福岡県立大学人間社会学部、13-25
- 園田尚弘 (1994) : 「『1900年頃のベルリンの幼年時代』における回想の問題」、『長崎大学教養部紀要人文科学篇』34(2)、127-134
- 多木浩二 (2003a) : 「場所と境界—ベンヤミン『1900年頃のベルリンの幼年時代』・空間の思考12」、『ユリイカ』35(10)、青土社、30-39
- (2003b) : 「街の名前あるいは都市の言語化—ベンヤミンにおける固有名詞・空間の思考13」、『ユリイカ』35(11)、青土社、19-27
- (2004) : 『雑学者の夢』岩波書店
- 近森高明 (2007) : 『ベンヤミンの迷宮都市—都市のモダニティと陶醉経験』世界思想社
- 丹生谷貴志 (2002) : 「来るべき子どもたち—野生と革命と異質性の場—」、『ユリイカ』34(15)、青土社、190-199
- 野村修 (1993) : 『ベンヤミンの生涯』平凡社<平凡社ライブラリー>
- (2008) : 「訳者のあとがき」、ヴァルター・ベンヤミン『ベンヤミン 子どものための文化史』平凡社<平凡社ライブラリー>
- 道籙泰三 (1997) : 『ベンヤミン解説』白水社
- 山口恵理子 (2002) : 「イメージとしての歪んだ身体的場—ベンヤミンの箱の解体」、『言語文化論集』59、筑波大学、25-84

* 本論文は、日本学術振興会・平成22年度科学研究費補助金・基盤研究(C)、研究課題名：集合的記憶を媒介とした世代間コミュニケーションに関する現象学的研究（研究代表者：神谷英二、課題番号：19520025）の補助による研究成果の一部である。